

【ネタバレあらずじ】

逆行の夏 Retrograde Summer (1975) The Magazine of Fantasy and Science Fiction 1975-02

●水星で母のドロシーとともに暮らすぼく（ティモシー）のところへ、月からクローンの姉がやって来る。姉の名はジュピラント、三歳年上だ。ぼくは男性として生まれたが、生後二、三か月で女性となって十五歳まで過ごし、二年前に男性に戻っていた。水星では、日に百回発生する地震や高熱から身を守るためにも、身体に埋め込まれた発生器によって全身を覆う力場を生じさせる必要がある。それは水星服（マーキュリー・スーツ）と呼ばれ、外から見ると人体が銀メッキされたように見える。〈服〉を身につけたジュピラントをぼくは幅20メートル、奥行100メートルの水銀洞に連れて行く。水銀の上に浮かび、泳ぐ二人。上の小さな洞窟へ二人が行ったときに地震が起き、入り口がふさがれてあたり一面真っ暗になる。ジュピラントの酸素が足りなくなり、ぼくのタンクとつなく。洞窟の中でジュピラントはぼくに真実を話す。ドロシーが実は母親ではなく父親だったこと、両親は宗教団体〈第一原理〉の一員であり、失われた制度である「核家族」を再現するため、ドロシー（当時は父親グリッター）と母親グルームで子供（ジュピラント）を作り育てたが三年で破局し、ドロシーは子供のクローン体とともに水星に来たこと、など初めて知る事実にはぼくはショックを受ける。三時間後、二人は救出されたが、水銀洞は破壊されてしまった。ぼくは「それに背を向け、ドロシーの待つ家へと歩き出した」。



さようなら、ロビンソン・クルーソー

Good-Bye, Robinson Crusoe (1977) Isaac Asimov's Science Fiction Magazine 1977 Spring

●冥王星の地下に作られた〈パシフィカ〉ディズニーランドで、14歳のピリは二度目の幼年期を過ごしていた。体は茶色で無毛。両足は普通の二倍も大きく、指には水かきがある。肋骨の間に鰓（えら）があり、水中で呼吸ができる。親友の少女ハルラは15歳になり、ここ一年ほどよそよそしくなってきた。ピリは、鰓をもった観光客の女性リーアンドラ（リー）と知り合い、仲良くなる。彼女はピリの空想物語につきあってくれた。ハルラはピリに、リーに近づかない方がいいと警告する。ピリはリーと愛を交わし、自分はもう少年ではなく、若者なのだと思う。実は彼は百歳で、若いクローン体の中に自分の記憶を移植したのだが、第二の幼年期を希望したため、記憶が抑圧されていたのだ。経済戦略家だった過去の記憶が戻り、あと十年ほどで惑星と冥王星との経済戦争が起きるだろうとリーに語るピリ。二人が話しているうちに〈パシフィカ〉の空が欠け、直径1〜2キロの破片とともに核融合炉の太陽が落ちてくる。あわてて海に潜り、津波をやり過ぎて二人は助かる。リーは実は精神科医で、ピリの目覚めを助ける役割を担っていた。ピリの予測よりも早く経済危機が訪れたため、経済相であったピリが必要となったのだ。人格が再統合され、ピリは大人として目覚めを迎える。

バービーはなぜ殺される The Barbie Murders (1978) Isaac Asimov's Science Fiction Magazine 1978-01

●月のニュードレステン市エニタウンにある統一教徒コミュニティで殺人事件が起きた。そのコミュニティでは七万人の住民全員が手術によって同じ顔と姿になっており、外見上はすべて女性で誰もがブロンドと青い瞳。性器はなく、指紋も消されている。外部の者は彼ら（彼女ら）をバービーと呼びならわした。バービーたちは個人の名前を持たず、自分を「わたしたち」と呼ぶ。全員が「わたしたちが犯人だ」と言うため、捜査にあたるアンナ＝ルイーゼ・バッハ警部補は困惑する。捜査を続けるバッハの目の前で、第二の殺人が起きた。被害者をナイフで切り裂いた犯人は人ごみに紛れて逃走し、バッハは別のバービーを誤認逮捕する。被害者は死の間際に「わたしは死んでしまう」と言い、「1215」と言い残して死んだ。識別番号1215の個体を拘留し、その寝室を調べると、大きな鼻とロヒゲをつけた仮面、黒いカツラなど変装用の道具が見つかる。どうやら倒錯者の一群があり、それを嫌悪する者が殺害を繰り返しているようだ。本部長は、バッハに誤認逮捕したバービーを犯人として公表するよう圧力をかけるが、それに逆らうバッハは、自らをバービーに改造し（ただし、性器は残した）、潜入捜査を行う。1215室に来た倒錯者と接触するが、逃げられてしまう。続けて、その倒錯者を殺したばかりの殺人者が訪れバッハを殺そうとするが、バッハが倒錯者でないことがわかり、殺人者とバッハは取引をする。それは、死んだ倒錯者が殺人者だったことにして無実のバービーを救い、事件の幕を引くというものだった。バッハは、倒錯者につけられた見えないインクのようなものが犯人にもついており、それを探せば犯人は見つかるだろうと推測する。

残像 The Persistence of Vision (1978) The Magazine of Fantasy and Science Fiction 1978-03

●オマハ原子炉のメルトダウン事故が起きて五年後、四度目の大不況の年、47歳のわたしはシカゴからカリフォルニアへ向かい、ニューメキシコ州で、壁に囲まれたコミュニティに辿り着いた。そこは、1964年の風疹の大流行により聴覚障害

と視覚障害をもって生まれてきたこどもたちが、自分たちのための新しい生き方を作り上げた一種の理想郷であった。一人の女性（ジャネット・ライリー）の明確なヴィジョンのもとに集まった55人の視聴覚障害者が1988年に共同体をスタートさせ、エコロジカルな農業を営んで自給自足している。衣服は身につけず、すべてのものの位置は全体ミーティングで決める。わたしはその共同体をケラーと名づけ、13歳のピンクと知り合いになる。彼女は共同体の二世目で、話すことができた。ケラーの人々は、アルファベットを用いる〈ハンドトーク〉、線形性をもたない〈ショートハンド〉、性的な接触を含む〈ボディトーク〉、三種の混成物であり、日ごとに変化する関係性を表す〈タッチ〉の四種類の身体言語を用いている。さらに、静寂と闇の中にいる親たち世代だけが***することができた。ケラーはひとつの生命体であり、新しいかたちの人のつながりだった。そこに嘘は存在せず、狭量や嫉妬や所有欲もない。しかし、その生命体の一部には決してなれないと気づいたわたしは、ケラーを去る。そして2000年を迎えた日、わたしはサンフランシスコから砂漠を超えてケラーに戻り、静寂と闇の中で生きることとなった。

ブルー・シャンペン The Blue Champagne (1981) New Voices 4

●ハング・グライダーの事故により下半身不随の損傷を負ったメガン・ギャロウェイは、高額な補助呼吸装置とボディーガイドを身につけ、テレビ・スターとして生きる道を選んだ。彼女は、体験テープの制作会社フィーリー・コーポレーションの代表となり、月の周回軌道に浮かぶ〈バブル〉にやって来る。〈バブル〉は、シャンペン・グラスに似た形をしており、直径百四十メートル、二重の球形のエネルギーマ場の間に二億リットルの水を抱えた娯楽施設だ。〈バブル〉でプールの救助員をしているQ・M・クーパーは、アンナ＝ルイーゼと同棲中であつたが、メガンと出会い、恋に落ちる。セックス抜きで官能テープに出ていたメガンだったが、落ち目になりセックス・テープを作ることになる。それが嫌で仕事をやめ、クーパーの家に突如やって来るメガン。アンナ＝ルイーゼはクーパーに警告を残して去り、メガンとクーパーは深く愛し合うようになる。メガンは自分の過去の記録ビデオをクーパーに見せる。そこには、事故にあつた後の体験テープも含まれていた。互いを深く理解したとクーパーは思っていたが、実はメガンのボディーガイドにはトランスコーダーが組み込まれており、自身の体験をテープに記録していた。そのテープを商品化することで、彼女は莫大な利益を得る。ボディーガイドの使用料は高額であり、経費を払うために彼女には選択の余地はなかつたのだ。怒り狂うクーパーをアンナ＝ルイーゼが冷静に諭す。クーパーは一年後にテープを体験し、彼女の愛が本物であつたことを知る。クーパーはようやく最後にこう思う。「彼女のしたことは、おれが許すも許さないもなかつたのだ」と。

Press Enter ■ Press Enter ■ (1984) Isaac Asimov's Science Fiction Magazine 1984-05

●50歳のビクター・アプフェルの自宅に録音電話がかかり、隣人のクルージの家に行くよう伝えてくる。行ってみると、クルージは頭を拳銃で撃ち、死んでいた。ロサンジェルス警察のオズボーン刑事が来て捜査を行う。コンピュータのモニターに「エンターを押すと実行します。■」とメッセージがあり、従うとプログラムが実行され、遺書が出力される。そこには隣人の悪事が暴かれており、消去法でビクターに土地と建物を譲ると記されていた。警察はリサ・フーという専門家に依頼し、コンピュータの内部を探る。ビクターは北朝鮮で捕虜となって敵に洗脳された経験があり、一方、リサはカンボジアでポル・ポト政権の虐殺を間近で体験していた。それぞれのトラウマを抱えながら惹かれ合う二人。クルージはコンピュータ・ネットワークを構築して、意識が発生するかどうかを試していたらしい。真相があいまいなまま、自殺と判断されて捜査は終了。リサはクルージの家を買い取り、捜査を続ける。しかし、ビクターが癲癇の発作で入院しているうちに、リサは自殺を図る。電子レンジに頭を突っ込んだのだ。遺書が残されていたが、それは彼女が書いたものではないとビクターは断言する。結局リサは亡くなり、オズボーンも拳銃で自殺する。クルージの家はビクターに譲られた。彼は家の電気機器をすべて撤去しネットワークと無縁の生活を送るが、不安は消えなかつた。

名古屋 SF 読書会

初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

<https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【今までの課題本】

- 1 2014・11・22/ル・グイン『闇の左手』
- 2 2015・2・15/バスター『虎よ、虎よ!』
- 3 2015・7・26/ブラッドベリ『華氏451度』
- 4 2016・1・23/イーガン『ゼンデギ』
- 5 2016・4・29/ハインライン『宇宙の戦士』
- 6 2016・7・30/ベイリー『カエアンの聖衣』
- 7 2016・11・23/レム『ソラリス』
- 8 2017・4・30/ノース『ハリ・オーガスト、15回目の人生』
- 9 2017・8・5/ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』
- 10 2017・12・2/伊藤計劃『ハーモニー』
- 11 2018・4・29/オールディス『地球の長い午後』
- 12 2018・7・21/小松左京『日本沈没』
- 13 2018・12・22/ウィングダム『トリフィド時代』
- 14 2019・4・27/山田正紀『宝石泥棒』
- 15 2019・8・3/クラーク『2001年宇宙の旅』
- 16 2019・12・22/劉慈欣『三体』
- 17 2021・10・3/劉慈欣『三体Ⅲ』(オンライン)
- 18 2024・6・30/飛浩隆『グラン・ヴァカンス』
- 19 2024・10・6/ウィアー『プロジェクト・ヘイル・メアリー』
- 20 2025・3・8/アシモフ『鋼鉄都市』
- 21 2025・6・21/ギブスン『ニューロマンサー』
- 22 2025・9・27/春暮康一『一億年のテレスコープ』
- 23 2025・12・27/ブラッドベリ『ウは宇宙船のウ』
- 24 2026・4・18/ヴァーライ『逆行の夏』

24 2026・8・8/未定

ジョン・ヴァーレイ作品リスト

短篇集

- The Persistence of Vision (1978)
『残像』冬川亘・大野万紀訳／ハヤカワ文庫SF (1980)
- The Barbie Murders (1980)
『バービーはなぜ殺される』浅倉久志・他訳／創元推理文庫SF (1987)
- Blue Champagne (1986)
『ブルー・シャンペン』浅倉久志・他訳／ハヤカワ文庫SF (1994)
- Good-Bye, Robinson Crusoe (2013)

日本オリジナル短篇集

- 『逆行の夏』浅倉久志・他訳／ハヤカワ文庫SF (2015)
- 『汝、コンピューターの夢〈八世界〉全短編1』大野万紀・訳／創元SF文庫 (2015)
- 『さようなら、ロビンソン・クルーソー〈八世界〉全短編2』浅倉久志・大野万紀訳／創元SF文庫 (2015)

長篇

- The Ophiuchi Hotline (1977)
『へびつかい座ホットライン』浅倉久志訳／海外SFノヴェルズ(1979)→ハヤカワ文庫SF(1986)
- Millennium (1983)
『ミレニアム』風見潤訳／角川書店(1985)→角川文庫(1988)
- Mammoth (2005)
- Slow Apocalypse (2012)

<ガイア>三部作

- Titan (1979)
『ティーターン』深町真理子訳／創元推理文庫SF (1982)
- Wizard (1980)
『ウィザード 上・下』小野田和子訳／創元SF文庫(1994)
- Demon (1984)

<Metal Trilogy>

- Steal Beach (1992)
『スチール・ビーチ 上・下』浅倉久志訳／ハヤカワ文庫SF (1994)
- The Golden Globe (1998)
- Irontown Blues (2018)

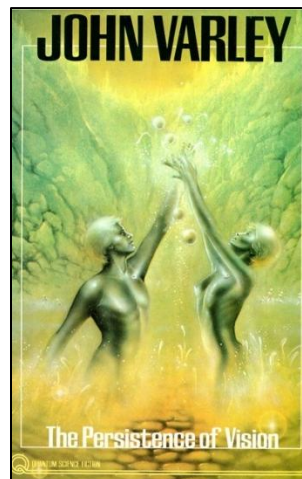


<Thunder and Lightning>

- Red Thunder (2003)
- Red Lightning (2006)
- Rolling Thunder (2008)
- Dark Lightning (2014)

※リストを作って驚いた。1998年から2018年にかけての20年でヴァーレイは長篇を7冊も出している(すべて未訳)。邦訳が途絶えていたので、何も活動

していないように見えていたのだが、とんでもない。この世代の作家で3年に1冊の割合で長篇を刊行していたのは、かなりすごいことではないか(マーティンは別として)。評判も決して悪くなかったようだし、亡くなったことをきっかけに、再評価と新訳刊行がなされることを切に望む次第である。(W)



スタッフ&ゲスト紹介

名古屋SF読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後もよろしくお願いたします。(文責・渡辺英)

渡辺英樹 @gonza63

愛知県春日井市で11月よりSF資料館を開館しました。SFセミナーでは「SF百年の宴」という企画を中村さんと行います。

舞狂小鬼(洞谷)

SF、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺睦夫

海外SFファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

渡辺啓一 @eleking

大学時代にSF研に在籍して基本を学び、あとはのんびりSFと付き合っています。

中村融／なかむらとおる(翻訳家)

中央大学在学中より海外SFの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、SF／ファンタジーのアンソロジー編集など、多方面で活躍中。